

バイロンの句

デンマークの言語学教授ニロップ博士 (Dr. C. Nyrop) は著書の『接吻とその歴史』の第二章で、「これはなんと人情に近いことか、バイロンはそのように願望して言う。

願わくば女人はただ一つ赤い唇をもたんことを、  
同時に彼女らすべてに口づけすることができるように。」

“That womankind had but one rosy mouth,  
To kiss them all at once from north to south. ”

しかしわたしは実はバイロンのこの二行の詩があまり好きではないし、この事も好きではない。詩はわたしは解らないが、「北から南まで」というような韻の踏み方にも興味を覚えない。その意味はといえば、あまりにも欲張りなばかりか、いささかくだらない、——これはほとんど「登徒子」の態度である。文芸復興時代のヨーロッパには次のような一種の習慣があったそうだ。およそ紳士が貴婦人に見えるには、識ると識らざるに関わらずみな接吻することを礼儀とするというのである。だがある人々は良しとしなかった。フランスのモンテーニュのが言い得て最も妙である。「これはとても非難すべき習俗である。貴婦人が口づけでもって客を敬すべしとは、その客が後ろに一組みの従僕を控えさせていさえすれば、彼がどんなに嫌がろうとも。我々男子にとっても決して上乘ではない。五十人の醜いのにキスをしなければ三人の綺麗な女性にキスはできないのだから。」残念ながら我々の詩人は知らなかった。もしこうした風俗を拡大して、ローマ王朝に行われたように、同性でも「友情の接吻」をしなければならぬとなると、それはもうとんでもないことになる。ローマの詩人 Martialis (40~104) はかつてこう言った。

「国外に出て十五年後、ローマに帰ってくると、それはわたしに多くの接吻を与えた、レスビア (Lesbia) がカトゥルス (Catullus) に与えたよりももっと多くの。それぞれの隣人、それぞれの毛むくじゃらの農夫が、みんなやってきては気味の悪い接吻をするのだ。織り工が来ては迫り、まだ洗濯屋とたった今牛の皮にキスをしたばかりの皮屋。ヒゲに、独眼の紳士、目の縁を爛れさせた臭い口の友人。まったく帰って来なけりや良かった。」

彼が書いた小詩にはいくつもこの事が述べられている。いま一章を抄訳してみる。

「わたしの頬には一枚の膏葉が張り付いている、  
ひび割れたのではないけれども唇には薬が塗ってある、  
フィラニスよ、君はなぜかわかるか？  
これは君に口づけするのを省くためなのだ。」

附記、この一篇は『接吻とその歴史』\*を読んで書いた。引用の詩文もすべてその書にある。

一九二七年八月二十日雨の夜に。

※初出：1927年9月10日『語絲』第148期

---

\*C. Nyrop の『接吻とその歴史』(The Kiss and its History, trans. by William Frederick Harvey.1902) London1901 版のコピーに拠る。

p.52; How human is Byron's wish that all women had but one mouth so that he might kiss them all at the same time:

That womankind had but one rosy mouth,  
To kiss them all at once from north to south.

p.96; Even Montaigne expresses his disapproval of such a state of things. "It is," says he, "a highly reprehensible custom that ladies should be obliged to offer their lips to every one who has a couple of lackeys at his heels, however undesirable he may be, and we men are no gainers thereby, for we have to kiss fifty ugly women to three pretty ones."

p.92; "Rome," says Martial, "gives, on one's return after fifteen years' absence, such a number of kisses as exceeds those given by Lesbia to Catullus. Every neighbour, every hairy-faced farmer, presses on you with a strongly-scented kiss. Here the weaver assails you, there the fuller and cobbler, who has just been kissing leather; here the owner of a filthy beard, and a one-eyed gentleman; there one with bleared eyes, and fellows whose mouths are defiled with all manner of abominations. It was hardly worth while to return."

p.91; Why on my chin a plaster clapped;  
Besalved my lips, that are not chapped;  
Philænis, why? The cause is this:  
Philænis, thee I will not kiss.